

## 賀露を愛した英傑たち～行商の歌人 山田輝子～

仙台市生まれの輝子さんが、横須賀で海軍に航空機部品などを納める仕事をしていた山田治郎さんと結婚したのは昭和12年。治郎さん27歳、輝子さん22歳でした。

鳥取大地震が発生した昭和18年9月、治郎さんに召集令状が届きました。11月に横須賀海兵団に入団。3人の幼子と妊娠中の輝子さんを残しての出征でした。

昭和19年9月、戦況が悪化し、治郎さんの郷里である賀露へ疎開しました。一軒の家と広い畠を与えてもらい、老父母や縁者の温情に包まれながらの生活でした。「夫が帰ってきたら、また横須賀に戻れる」とひたすら働き続けましたが、待ち続ける輝子さんに届いたのは、治郎さんの戦死を告げる戦死公報。昭和21年5月のことでした。

「賀露は昔から、浜に水揚げされた魚を女たちが天びん棒で担い、あるいは大八車にのせて山里に売り歩き、女が暮らしを立て、自立して生きる土地柄だ」

治郎さんの戦死を知った日から、輝子さんはこの地の習いに従い、行商をしながら子どもを育てることを決意しました。

朝、3時半に家を出て、市場で魚を仕入れ、6時過ぎには山里に持つて行って売る生活が続きます。市場に出回る食料が不足して鮮魚介類の自由な販売が禁止された時、自転車に積んだ魚を警察に没収されました。魚が売れぬままに遠い山家まで足を延ばし、ようやく帰ってみると、子どもたちが門口に立つて泣いていたこともあります。あまりにも辛いとき、輝子さんは賀露の浜に出て、じっと海を眺めたそうです。

夕昏るる浜辺にたちて亡き夫をよべど空しき潮騒の音

(ゆうぐるる はまべにたちて なきつまを よべどむなしき しおさいのおと)

昭和59年、歌集「行商の日日」を出版。「行商の歌人」として全国から注目を集めました。

昭和61年11月、ふとしたことから治郎さんが戦死した場所が「テニアン島」であることが分かりました。昭和62年、島の巡査慰靈団に加わった輝子さんは、密林に設けた祭壇の近くの木に、賀露の浜辺で詠った短歌「夕昏るる…」を書いた色紙を結び付けました。

夫恋うる色紙一ひらジャングルの御靈に供う心亢ぶり

(つまこうる しきしひとひら ジャんぐるの みたまにそなう こころたかぶり)

輝子さんを支えていたのは、治郎さんと4人の子どもたちへの深くて静かな愛でした。その想いは短歌として結実し、幾年を経てもなお褪せることなく輝き続けています。

今年、輝子さんは、生誕110年の節目を迎えます。

※ 参考資料：山田輝子 編集・著作「戦争…行商の歌」(1988年)



テニアン島に設けた祭壇にて